

■新春鼎談
 附属学校教育局と附属学校の課題と展望
 ●谷川彰英、千田捷熙、服部次郎……………1

■研究大会
 筑波大学附属中学校研究協議会●館 潤二……………3
 第55回高等学校教育研究大会報告●中塚義実……………3
 附属駒場中・高で第32回教育研究会が開催される(11月25日～26日)
 —シンポジウムのテーマは「高大連携の成果と課題」—●梶山正明……………4

■産学連携セミナー
 産学連携セミナー報告●菅野和恵……………4

■退職のご挨拶
 退職の弁●千田捷熙……………5
 39年間、有り難うございました。●服部次郎……………5

■名物先生紹介
 附属聾学校の名物先生—唯野玲子先生—●今井二郎……………5

■TOPICS
 第47回全附属高等学校教育研究大会報告●大野 新……………6

●広報紙名「ポローニア」の由来
 「ポローニア」とは、「桐」の属名であり、Paulowniaと綴る。本誌を「ポローニア」と名づけたのも、筑波大学の紋章に「五三の桐」が使われていることに拠る。しかし、ポローニアを付与した理由が他にも存在する。近代西洋医学を日本に伝えたシーボルトは、日本において、桐が瑞祥の象徴と見なされ、皇室をはじめ高貴な家柄の紋所として用いられていることを知り、Paulownia(後援者のオランダのパウロウナ公妃に因む)こそが植物の桐のイメージを表現していると考え、桐の学名(Paulownia imperialis)に定め、パウロウナ公妃に献上した。今後いつまでも、多数の読者に愛され続けることを願い、ポローニアの故事来歴やエピソードに基づき、ポローニアと命名した。

今後の平成17年度附属学校教育局・附属学校研究発表会、研究大会等予定

附属学校教育局と各附属学校合同での研究発表会、及び各校の研究テーマを深めるための公開研究会を下記の日程で開催する予定です。是非ご参加ください。

※各附属学校が会場となります(附属学校教育局を除く)。

学校名	テーマ	予 定
附属学校教育局	平成17年度筑波大学附属学校教育局研究発表会 平成17年度春期研修会	平成18年 3月11日(土) 平成18年 3月28日(火)
附属学校教育局及び 附属小・中・高等学校	筑波大学附属小・中・高等学校体育・保健体育科 合同研究会	平成18年 2月25日(土)
附属小学校	学習公開・初等教育研修会	平成18年 2月16日(木)、17日(金)
附属坂戸高等学校	第9回総合学科研究大会 第9回総合学科研究成果発表会	平成18年 2月16日(木) 平成18年 2月17日(金)
附属盲学校	第3回視覚障害教育研究協議会	平成18年 2月18日(土)
附属大塚養護学校	第41回知的障害児教育研究協議会	平成18年 2月 9日(木)、10日(金)
附属桐が丘養護学校	第34回肢体不自由教育実践研究協議会	平成18年 2月 9日(木)、10日(金)
附属久里浜養護学校	自閉症教育実践研究協議会	平成18年 2月16日(木)、17日(金)

新春鼎談 附属学校教育局と附属学校の課題と展望

谷川彰英(附属学校教育局教育長)、千田捷熙(附属桐が丘養護学校長)、
 服部次郎(附属坂戸高等学校長) 司会:生田茂(附属学校教育局教授)

司会・生田先生



司会 新年おめでとうございます。本日は、新春にあたって、谷川先生と千田先生、服部先生においでいただき、附属学校教育局と附属学校の抱えている課題、そして、それを切り開く展望を多に語っていただこうとお集まりいただきました。

最初に、それぞれの先生に簡単な新年のご挨拶をいただきたいと思っております。まず、谷川先生、お願いします。

谷川 法人化に伴い、全国で唯一、附属学校教育局というのをつくったということは、結果的にわたしは大変よかったのではないかと考えています。今まではややばらばらでありがちだった附属学校が、このような結構厳しい状況の中で一つになって対応していくというのは、やはりいいことだという感じがしております。

いろいろ厳しい条件がありますが、われわれがどのようなアイデアとプロジェクトを提案できるかが大事なと思っています。

谷川教育長



司会 ありがとうございます。それでは千田先生、お願いします。

千田 いろいろな困難に直面していますし、これからもそうだと思いますが、われわれはいつでも教育の最前線に立っているのだという自負と誇りを持ちつづけて、新しい道を切り開いていきたいと、新春を迎えるに当たってその思いを新たにしています。

司会 ありがとうございます。それでは服部先生、お願いします。

服部 明けましておめでとうございます。わたしは大学を出て坂戸高校に就職しまして、今年で39年目です。定年の1年前なのですが、この度、転出の話がまとまりまして、教育長のお許しを得て退職させていただくことになりました。39年間筑波大学にお世話になり大変感謝しております。

司会 ありがとうございます。それでは、新年にあたり、それぞれの夢を大いに語っていただこうと思います。今年度は、「このようなことをぜひとも実現してみたい」という夢を語っていただこうと思います。まず、谷川先生からお願いします。

谷川 この2年間で附属学校同士の連携などが随分できてきたと思っています。一つの成果は、多少の困難はありましたが、時事通信出版局との産学連携

の研究を通じて、お互いに関係ないと思っていた先生方が手をつなぎはじめたということです。この意義はやはり大きかったと思っています。

この筑波大学の附属学校には五百数十名の非常に優れた現場の先生方がいらっしゃるわけなので、その先生方のパワーを活用しない手はない。非常に重要な宝庫であると思っています。懸案事項になっております大学院の構想などで現場の附属学校の先生方が活躍できる場を広げる、これは多分できるのではないかと考えています。附属学校のパワーを学内にも学外にも改めて示していく必要があります。大きな期待を持って今年取り組みたいと思っています。

司会 それでは千田先生に、新春にかける夢ということで、障害児教育も含めて、学校の先生との関わりも含めてお話をいただけるとありがたいと思います。

千田 わたしが附属学校にお世話になって感じたのは、大学の教育に占める役割は大きいということで、そのことについて改めて考えさせられることがたくさんありました。

大学にとって研究と教育は両輪であると思うのです。特に教育ということについては、当大学は明治以来の古い伝統と実績を持っているわけで、それを直接現場で担ってきたのが附属学校であると思うのです。したがってこれからも、大学の方にも附属学校を大いに活用していただきたいと思っておりますし、逆に、現場にいる者は、大学の附属学校だからこそできること、そしてまた日本や世界にアピールできるわけですから、大学と一層連携して自分たちの力量を高めるような観点を常に持ちつづけていただきたいと非常に強く思います。

わたしは肢体不自由養護学校の校長をしておりますけれども、障害児教育という観点でいえば、非常に充実した教育を附属学校も実践してきたし、大学側の心身障害学系の先生方の支援と指導をいただきながら実践を重ねてきたなと思っています。

ただ、「今までできたから、全国から評価されているから、だからいいのだ」ではなくて、これからは、新しいものをどんどん自分たちの方から実験していかねばならないと思うのです。実験をするということは、不安を伴いますし、時には失敗することもありますけれども、それを恐れなくて試みるということが、必ず成果を生み評価としてつながっていくだろうと思っています。

司会 それでは、服部校長先生に夢を語っていただこうと思います。先生、よろしくをお願いします。